



三院文庫

三院文庫

Repeating geometric pattern with stylized characters in red and green.

遠13  
1319  
5



門へ 18  
1317  
巻 5



今言

無飽三文圖會卷第二目錄



天象之部



雲くも 闇雲やみぐも 白雲しろぐも

霧きり 晝仕ひるし 宵仕よるし 雲くも 店仕みせし 霧きり

雨あめ 天泣そらなき

風かぜ 大盡風おほとんかぜ 手代風てしろかぜ 馬耳風うまみみかぜ

月風つきかぜ

雷かみなり 雷獸らいじゅう 雷爪らいづめ

霞うき 朝霞あさやけ 夕霞ゆふやけ 朦朧霞もうろうやけ 霰あられ

霓に 白雨しろあめ 朝立あさだち 盆立ぼんたて

嵐あらし 野嵐のあらし

山嵐やまのあらし 頭嵐かぶたのあらし

稻妻いなづま 山嵐やまのあらし 御下ごさ



朝ヤケ  
夕ヤケ  
勝ヤケ



晝仕雲  
賈仕雲  
店仕雲

露つゆ 雪ゆき 霽散あられ

自前雪こゝろゆき 他取雪たれゆき  
見忘みわすれ

霜しも 初登はつとがり  
成雪なりゆき 肩雪かたゆき 山雪やまゆき 舟雪ふねゆき  
水みづ

諧わい 詼くわい 新しん 書しょ

全三卷 右同新

春情指南車しゅんじやうしなんぐるま

全五冊 近刻

○雲。白居易詩。日暮雲鳥。鳥の糞。似人の白。まね  
か。新米のちよ。ちよ。油揚のとき。着るものを着る。身仕  
舞所の晝。とんび。手だん。その山。昆布鏡臺のさつ。ま。芋。いつ  
の間。ま。敷。減る。是。の。葦。を。絨。たる。詩也。され。住  
吉の御神の歌。よ。も。

汗。と。木綿。ぬ。この。昔。ころ。も。結。き。ぬ。お。や。は。細。帯。を。心  
う。な。又。一。説。よ。こ。ける。時。着。る。衣。い。さ。も。肌。く。て。内。に。結。き。ぬ  
と。て。着。る。なり。是。を。其。舟。よ。い。る。時。の。態。なり。風呂。が。浴  
め。山。の。腰。よ。何。と。首。筋。あり。の。ど。り。け。く。額。の。不。二。の。真

白。よ。見。ゆる。素。より。肌。の。雪。を。炭。を。も。雪。と。欺。く。這。白  
粉。の。雲。なる。べ。都。を。之。を。みる。よ。首。の。何。と。り。め。き。て  
真。白。あれ。ど。き。もの。昔。衣。を。着。る。猶。小。便。桶。見。よ。花。を  
生。た。る。が。如。く。就。是。雲。へ。陰。陽。の。二。氣。む。く。生。る。所。也  
風呂。の。湯。氣。よ。む。され。後。茶。色。な。顔。も。真。白。よ。見。ゆる。  
と。白。粉。の。こ。づ。け。雲。つ。つ。や。る。な。ら。這。般。不。滑。粧。を。の。成。へ。し  
○雨。段。和。訓。や。け。也。又。朝。夕。雲。の。赤。く。照。を。朝。や。け。夕。や。け。と  
の。此。や。け。の。同。い。の。様。や。け。と。い。ふ。闇。雲。変。ど。く。朦。朧  
と。なる。也。闇。雲。和。訓。を。ん。く。其。色。た。の。真。青。よ。なり。て

絶々に見ある夫より朦霞とぬく。志づき輝くと華  
 美に見ある。這雲起る時の其色真黒なつくとをこる。  
 一寸前もみぎはちり。又無闇ともいふ故にむやにい何ふ  
 なく梅の花。劍の稲妻をききめり。又の氷なんと降  
 と何り是を闇雲のやらみちやと云何とて後悔さすは  
 たげ雲霞と逃る。的なり故に闇雲と霞とい原無分別  
 の一ツより。二ツより。俗に霞を春のものとなしたるは  
 霜の守の意も。紅霞の意も何れ。這般の夏に圓機活  
 法を詩をあらざる。筆の先刻承知なり

○霧務の昼つとを昼仕雲。霄よたらを霄志まり。更くたつた  
 店仕雲也。此世界をめぐ。雲中の人家或曰雲と清く讀む  
 誤なり。義理と濁く讀む。此國別。人間不通用の義理  
 立引り。不劫勝くとする。故に雲を俗にやといふ。此雲の  
 中に入るとの。即雲中の人也。却て此義理を病むもの。親  
 兄弟の義理を忘れ。當座雲よ終身の義理を暗まるとい  
 是雲中みななればなるべし  
 ○霞。南花。徑。二所謂。顔。姑射の神女。よ何れ。昔阿古屋。氏  
 曰。勤といふ字。二字の。ないとい昔の。となり。今ハ。態の。字。を

漆ま二字ふたとなりなり女をんなのひと一ひともも今いまおお足あし一ひとははじ  
九こ十じゅう六ろく位ゐのよきつつとと何なにとと見みゆゆ故ゆゑ又また幾いく心こころ助すけととももななくく二ふた字じのよま  
とと何なにとと窺うかが天てん鏡きやうをを以もつてて這この二ふた字じをを見みるる又また餘よそ所ところ目めはは看かんる  
といい甚し遠とほひひ也なり勤こつとめのい一ひと字じのよ制せいををななつつてて苦くままなるる則すなはちち色いろも  
もも見みへへびび名なのよ空そらはは立たちちななるるべべしし唯ただ其その色いろ赤あかくく花はな麗れいままを  
ももるる慾よく火かのよ輝ひらりり心こころ水みづ淺あさ黄わうのよ淺あさくくままるる原もとのよまま地ぢが  
ままししどどややもものよとと流なが石いしのよ粘ねり酸さんはは萌も黄わうのよ色いろももままししれれりり夫それ  
ささくく客きやくのよ前まへ後ごはは影かげ日ひ南なんのよ色いろをを何なにとといいふふ黄わうなるるハは金きん  
のよホほきき也なり故ゆゑ人ひと句く何なにとといいふふにに以もつてて証しやうととななるる以もつてて恋こひ思し案あん外がい欲よく心こころ

算さん用よう中ちゆう嗚な呼こ悲ひ夫ふこのよ二ふた字じのよままるる原もとははとといいハは持もち丸まる長ちやう者しやのよ  
金きん持もち草そう道どう具ぐせせるるのよ垢あひたたしし自じ慢まん僅げんななととをを算さん用ようたたくく  
智ち恵ゑのよ何なにとと積つりりとと見みゆゆ何なにとと取とりり遠とほくく間ま遠とほくく三さん八はち四し九くのよ  
人ひと中ちゆう高たかのよままれれるるままええ坊ぼうををななしし馬ま鹿かをを自じ身みににままれれ  
何なにとといいふふ尻しりのよぬぬりりるる古こ又またままるる此こゝろ様さま不ふ順じゆんなな氣き候こうはは連れんてて  
烟えん花か世せ界かいのよ人ひと心こころ寒さむ暖ぬく故ゆゑささままるる二ふた字じとと不ふ義ぎ理りががいいややまま  
ししてて漸しぜんにに氣き候こうのよままるるハは一いち概がいはは烟えん花か世せ界かいのよ氣き候こうはは  
何なにとといいふふ是こゝろ大だい盡じん國こくのよ氣き候こう不ふ順じゆんかかへへつつてて這この世せ界かいははななるる  
へへしし彼つゝ天てん津しん橋きやう上じやうはは杜と鵬ぼんををままききくく毛け唐たう人じんのよ歎なげ息いきををままれれ

却る此二字を見く。是は做ふ又何り

○雨 雨和訓あめ。天和訓あめ。俱は何めなり。回て空言を

ゆふを俗にあめといふ。雨鉛通じれば也。夫天又雲ありし

雨ふる。是を天泣といふ。と昔表帛にも出く。真劍の

三戈圖會も載を交し。作者の捺天的話の河原前

篇既空泣の雨を挙るといども。這天泣の考據をい

さ。回て再復るも載を天泣ハ唐でも天泣也。天よくも

なるし。雨ふるハ後心なるし。位がど。搜神記も雷公

又代つ。雨を行法を載を。又此雨や小雨と泣法ハ心

ひよつと想々居る客と這般に。はつとあつて悲しからう

と。又々様王れを。した。嘸かな。かろくと。始終男の

顔を見ぶ。つと其情をうつ。又色く。外の哀しう

ことを思ひだ。耳は愁場の淨瑠璃をきく。氣が情を

移せば。涙はひとり出るもの也。といふ。故に詞は。情濃なり

回。這雨は。何ふ者儘。よ三度笠。よちよ。よかつき。毎むん

通ふ。と何り。又一種く。や。位の雨。何り。勤なれば。そ癩蝦蟆

の無理を。もきくと。何受く。居れば。あつづ。無と。胸くる。不

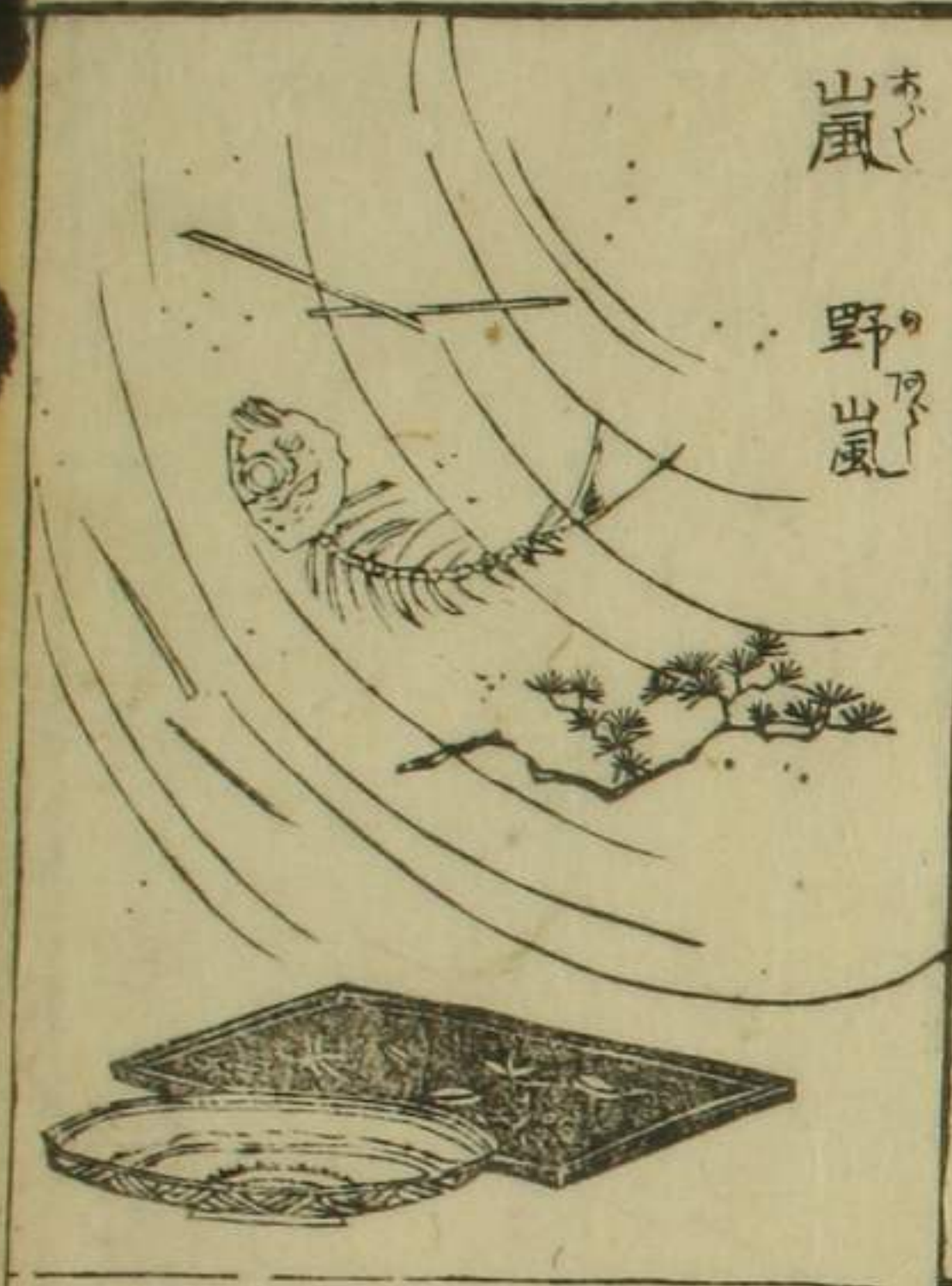
しき。癩癩。涙多。く。ハ百姓。とり。ち。己。田。地。水。を。ひ。き。

吾畑のそと思ひ稻の穂の想れられと氣づ無上は悦び豊  
 年の瑞とある者ハ取くもつらぬ間遠なり故は天泣ハは  
 トめの方とも不祥の雨と名に

○白雨 朝立ハ客人國は多し自らあるべし。益立一名益  
 津ひる森のゆめよ雲となり雨となる。故は益立立ハ立なり。  
 益津ハひるつとひといふ妓家者流の略語よしせんほ也  
 夕立ハ何由立とこよつて白雨の空のごく尻の真赤  
 よえげる嘘のよくなほ也受しと想嫁のころへ何は彼店も  
 のし出番のよめんのほ又ハ門限の六時限り。雲は起り



天泣の雨



嵐野山嵐



風 大盡風 半代風



山嵐 俗は頭をうし 又おさかり

馬耳風



雨頻りよそそぎ雲雨の情せましくなく是も苦界とみんくの  
泣くもせざるおつとも暗くは木んの嘘つく中よ夕立ぞも  
異あふび夫山の端の月舌を吐もぐどく小笹の風ハ笑ふは似  
たり月の光のあふく〜夕立雲のむげやもく得く  
後ろをげらるる何り回く故歌よ

急ぐば濡ざらまは旅人の何とより暗る野路の村雨  
是これを詠し奇なり性急の息業雲雨の情おべつら  
の涙の雨は袖ぬれ又逢瀬の一言よゆぬ日柵の損を  
はる是いそぎ業の何やまり也嗚呼太田道灌あくよんど

物なるが哉

風大擬野父世界は吹風ハ真の風鮮し。まづうを吹く  
せんどの風が引くゆゑに井々れど郎君トやと聞け今そ  
こ一行といふまきことまづ吹のわして夫より此風をし  
るれを吹をとし。墨紅を吹きかんざしうがいを吹く取  
く仕まきくをき。鬢をさると梳ながし。俄は風と吹くも也  
今まづハ何所も居とら此風は何人ぞく〜て悦び已が  
をこれく白つき何しきを風と思ひく。深切なるも人目お  
ろ〜く故よ這風氣の毒とあり〜心甚さむ〜此風よ

吹上され。已恍が出る時。人の髪根の志まる位。思ふて  
おつとさる也。都く。這世界の風皆真の風。さるは。親方  
當つ。吹風ハ置屋の二階よのぶふ。好と客の来。時ハ  
傲。吹かまり。思ひもさるめり。又夜。其翌風。少  
持病の小息子。世界異見ハ却。馬耳風の空吹風。ときくを  
るへ。大盡風。近來。這風。寒く。風伯のとりちぐ  
と見ゆると多。夫君子の徳ハ風なり。小人の徳ハ草なり。  
かく有。前篇の正くなら。君子の風と  
此とも看。草風。は。偃。秋風の秋れり。

却。のつけ。反ると。り。暴破。野分。の。見。け  
を。倒。是を以。故。花柳世界の花をち  
ら。却。馬席を。散。黄葉の大様。薄紅葉の  
黄金を。散。回。當世。代風を。吾物の。の  
吹。次。宿下りの吹。更。志。布。の。風。は  
よ。身。の。茶屋。此。風。は。吾。身。の。吹。ハ。飛  
風。後。悔。先。な。山。風。俗。は。嶺。山。風。又。野。鳥。と。か。い。の。松。ハ。根。を。ぐ

倒れ硯蓋の山守をのり影をからし料理番膳をつぶ  
濱焼の鯛目玉を吹とびされ残物の更に残るさる  
此喰嵐ハ山海野者を吹とろく地を松うく鳥有  
とるき跡ぐ大原を損ふ故野ろしとふ都て野  
分の何しのごく浅るよ見ゆる物なりし跡ぐかあるべ  
月風の吹とろり

月風多く蜀吳の國よふく也百海国より来る風いたる  
とるき悪臭くこの風よろふ人ハ嘔吐を催せとる

山嵐又頭をろり俗よ山でこといひ又かさぐりとのふ

這二を合して山嵐と牽強る也又例の山よ村雲むとくと  
起りなづ村もの膳を潰させてるペンくお下りの頭玉出  
何々い恋の悔も身を浮船の娼妓も楫とりの移り持て  
ま一流れも熟水高賣なんも乗るも男力藝者も  
磁石の針の方角を失ひ尻又帆をうけし迹の照く  
もりさ一定もぬ氣遠ひ日和よ出らやん娼おさるま  
その舟賃もびんづよ骨を折あぶ

雷月令よ九月雷鳴く諸の虫蟄る此雷色変の虫  
を驚まし仲居の酌とり奥新米のちよぼんすの虫いよ

五アの魂たましいを潰つぶしとぞんまりと蟄ひそる而も此雷九月  
 十月の頃とき著やくせし時々々鳴声内中なるこゝろより裏うらくなり但たゞし  
 騎こを揉もみ好このんご人の耳みみをこまは王充わうぢゆうが論衡ろんけいと雷公らいこう  
 の形かたちを圖ずまるものハ是これと異ことなり此雷このらいを火かを  
 さの松まつの何なになり次つぎより年としとつと太鼓たいこをたゞ人の  
 頭かぶを敲たたく尤なほ安置屋あんぢやうの世界せうかいより多おほし又此雷このらいのるる衆しゆ  
 悦よろこびくるあゝ悪太鼓あくたいこをうち平生へいぜいのむ孫まごきを暗くらま  
 蓄生ちくせい何なにの形かたち小猫せうねこに似にたり常つねハ亭主ていしゆの領のうの下したを住家すまがと  
 し又能よく人のふところへ這は入いる即是こゝろ搜神記そうじんぎより前まへ諸雷獸しよらいじゆ



なるをの耶。雷凡この凡ふる者ハ兄弟骨肉をつ  
んざくれ身の痛となること甚し

○霜妻。いまづあつた皆妻也。苦界十年うその空町定め  
ぬ皆妻や。宵の東。又西は影もたうなき誓言の皆人  
ごとよあくる起請誓紙は正は是蟪の玉子とちを見  
如く。あちでも一則なるとりひ。此方でも一則なる  
いふ同く人ハ皆吾妻の心たの。娼妓の身を鶏印と  
ちふせ福が爾ハいふ。是を以ての故は皆妻のことづけ。  
サアむつとでも言く見よ

○霜。和訓おのぼり。正月三日の中は降雨をおさぐりとして  
豊年のまるとなひ。変く作者の作語は狂妻  
詞の海を見く者ハ知ん即ち霜と雨とおさぐりとおの  
なりと似りの言を以ての故は。這牽強をな  
まなり。霜ハ露のなると。即ち此霜草ぶくつ内  
けき所より来く。四時絶間なく。花柳世界をめぐ  
を但し初霜といふ。初登りといふ。同く亦狂妻をも  
つこつつけ

露結ふこれしも霜の初のぼり言の紫草の鉉色なる

眼めは看みへぬ散さん賤せんよ水みづ金かねの色いろを何なにらまし。露つちのなき  
けの何なにりしなべあぐ。鼻はなの先さきふく恋こひ風かぜは形かたちへ露つゆの何なに取と  
中なかつ丸まるく轉ころび安やすし己おのれが齒はの黄きむをたるより。能よくか絲いと  
つけの甚えぶを深こほく。秋あきのほくきを輝うかる。醉すいまどらみ露つゆ  
ちどもなきへ却かえつて白露しらつゆの白しろ銀ぎんと霜しもよそむ黄きいろ色いろな  
物ものの澤さかなれば千ち入いれの紅べに葉は一ひと入いれよそむも世よ界かも多おほく  
べし。亦また霜しもが波なみの霜しもよつてい其そのまほひ日ひ南みなみ鼻はなといふ。  
雪ゆきへ作つく者ものしつよ由よしき詰つりり。自よ前まへ雪ゆきへ積つりて節せつ季きこ  
とけぬ物ものをむひ肩かたの雪ゆきへ四よ寸すん五ごアア人ひとの肌ひだも積つるを限かぎ

となげ人ひと目めは寒さむき醉すいがり國くに腕うで出でし氣きが利きく有あら。  
羅ら生せい門もんの鬼おにへ痛いた目めへ為なる。他た則すなはち雪ゆきへ全ぜん盛せいぬるあどやく  
東とう何なになる。高たかい前まへへ積つ雪ゆきの船ふね雪ゆき。山やま雪ゆき。盆ぼん屋や雪ゆき。何なにし  
度たびの雪ゆきなむて得えく。全ぜん盛せいをまをを能よくせ。思おもひしとへ  
淡たん雪ゆきの兼かみる積つり思おもひきや日ひのさし。何なにつ雪ゆき達たつ磨まさ  
とれば人ひとも一ひと尺せちり若わか界かも果はべいつまむぞ二十にじゅうと五ご六ろくの花はな  
花はなの姿すがたも散ちりやまぐ。雪ゆきの仏ほとけも似にたるべし。仏ほとけたのんぐ地ぢごとへ  
墮おる叶かりぬ時ときの神かみたき。全ぜん盛せいのちり雪ゆき何なにれむべし。彼かの  
何なに某たがの女むすめ將しょうの姉あねりつけれし。雪ゆきの夜よも因いん果ん觀くわん面めん小せう野のの



散ちかれ

何なにれ



水みづ



雪ゆき

自よ前まへ雪ゆき他た前まへ雪ゆき

成なり雪ゆき

有あ雪ゆき

街息女こぞくじよかいらの雪ゆきのみろ輪わくむ乞食こじきとまどの成雪なりゆき々  
 是全盛ぜんぜんの報むくいなとげや世間よの全盛ぜんぜんつゝ給たま一雪ゆきありの  
 雪ゆきしづい雪ゆきと化たと又また戯あそむる身みは是終これつひは借銭かいくせんのたど  
 と積つる雪ゆきなりて消きえ思おもひをさる時とき何なにをわかとも  
 後のちは塩柳しほりう紫むらの文ふみも間まは何なにまば智恵ちえは其身そのみの敵たぐとなる。  
 昔むかしのきぬぐ引ひえろ。木綿もめんの綿わたの雪ゆきの色いろ定さだま暮くしの  
 即まづちこれ是これなり雪ゆきの雪ゆきころしをくは却かへつてあつもの。  
 嗚呼ああさころぐー雪達磨ゆきだま  
 雨散あまの見みそれなり濁にごく讀よみ誤まち也見みそれよく實じつへ見み

忘れ也。這世界へ玉露の玉さうよ。軒の板屋の音づも人  
得くこのまぢれよ。何ふ客の方うら名ざりの唱妓をりひの  
外も見それよ。何ひ面目灰よふふま

神無月何をまろの玉の客はく定なくみそれぢ也  
高直貝よまろまろあふれもなぬ散なるる石童丸何  
られのそつつけ村時雨ざつと如斯

氷ハ水結ぶなる雪の類なり雪を六ツの花とのふ故六  
の花を八ツよつけ八ツの花を十一よつける氷ハ高利なり  
客ハ是ハ氷くく其茶屋をゆつて却て日向のこけ

りのどく。何時の間も消く仕よふ故ハ氷門をいでば  
悪吏千里を走ると悪ハ評判のまろるをまなり古語  
曰氷よこりよ道齋坊嗚呼まろ悪ハ氷つけなり

昔王祥る魚りよ卧く鯉をとる全軀まろ思ひつ風  
ひきそらなる仕吏なり。今時百出せ指身よしてまろひ

酸味噌は好く氷よふく泣よ及びこん無分  
別な孝行の爲人へなれど此世界ハ一種の氷あり女郎  
出たよめをつひく曰おまろんよ早く逢ふとおろく言  
容よちめさ成まろ可愛そらなと思ろく何れあて



おくれなされト乞食が火燵のかまろよ犬だゆゑ寐る氣で  
 情もなほもなく。温がつもぐつと刻に客ハのち切  
 氷の中を何よ孝行な人。誕たゞゞ。這氷よ  
 寐なり。作者の曰。氷ハ水よ属し。天象の部よ入る  
 物なり。雖然。雪ハ氷よりこれみや。新内節の典  
 故よとづき。就雪の條よをく。亦是作者博識を  
 著る也。

魚飽三賤圖會二之卷終

